ヤクザと詐欺師

詐欺師のスティグマ　7

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18286715

モ腐サイコ100, モブ霊, エク霊, 霊幻総受け, 芹霊, テル霊, ショウ霊, 律霊, モ腐サイコ小説50users入り

ヤクザと元愛人パロ、完結です。こういうエンドが好きでなんかすみません。お好きな方は楽しんでいただけると嬉しいです。この後はおまけ後日談に続く予定です。

ネタバレです。

ハピエン（？）ハーレムエンドです。

Table of Contents

- 詐欺師のスティグマ　7

詐欺師のスティグマ　7

ニセ霊とか相談所にテレポートしてきた男は、キョロキョロと辺りを見回し、ソファーで眠っている霊幻に目をとめた。
「おい、おい霊幻」
ゆすぶって起こす。
「ん……」
「迎えにきたぜ、早く起きろよ」
ゆるゆると目を開いて頬の赤丸を確認し、霊幻は一気に覚醒した。
「ばかおまえ……っ！なんでここに来た！？！？」
「おいおいつれねーこと言うなよ、恋人だろ？」
「そのわりにはテメー俺を切り捨てやがって……ってそんなことはいい！早く逃げろ！！」
「だから助けに来ただろーが。わーってるって。すぐテレポートして……ってうわっ！！」
霊幻を抱き寄せてテレポートしようとした男が何者かの能力で阻止される。
「う、わっ」
念動力で浮かされて男から引き離された霊幻は、丸くて硬いバリアの中に閉じ込められた。
と、間髪おかず男は同じようなバリアに閉じ込められ、空鞭で拘束された。
「やべっ、身体から出れない……！？」
男が叫んだ時。
「ほらやっぱり……みんなで見張ってて良かった」
茂夫が超能力者たちを引き連れながら、ぞろぞろとニセ霊とか相談所に入ってきた。
茂夫たちが1番恐れていたこと。それはエクボがテレポーターの超能力者に取り憑いて、霊幻を連れ去ることだった。
超能力者たちはカツカツカツ、とエクボに歩み寄り。
がっ、と茂夫が裏拳でエクボを殴った。
「エクボ！」

思わず霊幻が叫ぶ。
霊幻に接するのとは違って。
みんな、エクボにはヤクザらしい凶暴さを剥き出しにしていた。
「〜ってぇな、シゲオ！久しぶりだってのに、ご挨拶じゃねーか」
「よくも……」
ざわ、と茂夫の髪が暴れ始める。
「よくも、師匠を見捨てたな？」
「へ？」
意外なことを言われてエクボは間抜けに返してしまう。
「見ろ、エクボが見捨てたおかげで、師匠は手足の爪を剥がされて、足の裏を切られた。僕がいなかったらどうなってたか分からない。エクボ、エクボは自分だけ逃げのびて……！」
「あー、それはだな。……言っていいか、霊幻？」
エクボが困ったようなニヤニヤするような、変な顔で霊幻にうながす。
「……あーいいよ。このさい誤解が無い方がいい」
霊幻は顔を真っ赤にしてから、そう答えた。
「金を借りてたヤクザの動きがおかしかったから、俺たちはいつもは裏口のあるマンションで暮らしてた。それで俺は安全に逃げられた。でもまぁ、その、だな。その時は痴話喧嘩が続いててだな……」
「痴話喧嘩？」
茂夫の冷たい目がエクボをじっと見つめる。
「霊幻のヤロウが不満ばっかり漏らして……」
「はぁ！？エクボがスワッピングだの3Pだの俺が嫌がるプレイばっかやりたがったからだろーが！！しかも極め付けに……勝手にハメ撮りとってたのを怒ってんだ、俺は！！」
茂夫たちの冷たい視線がエクボに注がれる。この場では基本的に超能力者たちは霊幻の味方だった。
「……まぁ、痴話喧嘩だ。それでその、ハメ撮りがバレた時に霊幻が飛び出して行って、運悪くヤクザが乗り込んできた。俺は隠し通路から逃げられ、外をうろついてた霊幻は捕まった……ってワケだ」

「結局エクボが悪いんじゃないか……」
茂夫の髪のゆらめきが激しくなり、エクボの力が少しずつ茂夫に吸収されはじめる。
「いやそもそも、ヤクザの言い分がおかしいだろーが！！俺たちが借りたのは２０００万、霊幻名義の高級マンションとスーパーカーを売り払えば利息どころかお釣りがくる額だ！霊幻を捕まえた時点で、みぐるみ剥がしてんなら拷問なんかする必要はねーはずだろ！！」
慌てたエクボが弁明する。
ぴた、と茂夫の能力が止まる。
「……きいてない」
つまりは。
「あのタヌキ親父……！兄さんたちを騙したな……！」
組長が、欲をかいたのである。
「素性の怪しい俺と霊幻に金を貸してくれたのはありがたかったがな、俺たちの事業が軌道にのったとたんに利息をめちゃくちゃに吊り上げやがって、10億返せとか言い出しやがった。それで身を隠せる場所を確保しつつ、荒事専門の弁護士を探してた矢先に、カチコミされたんだよ。これでも俺様怒ってんだぜ、茂夫。よくもめちゃくちゃな理由で霊幻を犯してくれたな──？身体に霊素が残ってるぜ」
エクボが憑依してる人間の目が、怪しく黒く光る。上級悪霊のその気迫に思わず茂夫たちは一歩後ずさるが──
「どうせエクボが怒ってんのは、俺がモブたちにマワされてるの見れなかったからだろ」
霊幻の悪態で台無しになった。
「バレたか」
にやりと悪霊は笑う。
「とにかく、こちらには借金を返す意図がある。不当に拘束されてる霊幻を返してくれ」

冷たい。
冷たい目で、茂夫はエクボを見下ろす。

「いまエクボが消えれば、師匠はずっと僕たちのモノだ。返す？なんでそんな必要があるの？」
ゆっくりと、手をかざす。
「さよなら、エクボ」
「待っ……！」

「『助けて』、モブ」
その言葉に、びくりと茂夫は身を震わせ、力の行使を中断して後ろを振り返る。
「師匠……」
「俺たちを助けてくれよ、モブ」
真剣な表情で、霊幻がまっすぐ茂夫を見ている。
「そーだぜシゲオ！なっ、また霊とか相談所を立ち上げて、俺たちで面白おかしく過ごそうぜぇ？」
その隙にすかさずエクボが籠絡に入る。
あからさまに茂夫が動揺した。
「そうだぞモブ。お前が望むなら、また相談所をやってもいい」
「ほんと、に？」
茂夫の目が揺らぐ。
それは茂夫がずっと願っていたことだったから。
「俺様やシゲオ、霊幻に芹沢も。残りのそいつらも雇ってやってもいい。なぁに、今なら金ならある。前みたいにワイワイたのしくやってさぁ、アフターファイブには霊幻とデートでもして、な？」
「……いいなぁ」
芹沢が懐かしそうに、うやらましそうにはにかむ。
霊幻とエクボがペアを組むと、言いくるめでは無敵だった。
「なぁ、モブ。相談所に帰ろう」
そう優しく霊幻に言われて、くしゃっと茂夫は顔を崩す。
「帰りたい……！」
ぼろぼろと涙を流しはじめた。
「帰りたいですよ、師匠。でも僕は、あんたの教えにそむくことを、山ほどしてしまった……！もう、帰れない……！」

「……俺の計算違いで監督不行き届きになってのことだ。許す！でもこれからはダメ！」
それでも茂夫はぐしぐしと泣き続ける。もう後戻りできないところまで、組に入り込んでしまっていた。
「……ヤクザなんて、やめたいぃ……っ！！」
「その言葉をずっと待っていたよ、兄さん」
ところが律が涙目で、嬉しそうに茂夫に言った。
「ずっとショウと準備してたんだ。いつでもこんな組、潰せるように」
「俺たちをこき使うだけ使いやがって、ずっと化け物みてぇに見てきてろくな扱いをしやがらねぇ。その上俺たちを騙して霊幻さんを拷問させただと？もういいだろ、こんな組」
「律……ショウくん……本当に可能なの？組を潰す、なんて」
「兄さんにやる気があるなら、ね。簡単なことだよ。……耳かして」
ぽしょぽしょ。方法を耳打ちされて、残忍に茂夫の目が細められる。
「ほんとだ。簡単だね、律」
「恩義は充分返した。組には無くなってもらおう」
にっこりと冷たい笑顔を茂夫と律が浮かべる。
「あ、その恩義のことだけどな、モブ。どーにも引っかかってパソコンで調べてたんだが、お前の両親や芹沢のかーちゃんが入院してる病院、組の息がかかってんぞ」
「えっ」
「スマホで電話して確認もしたが、全員ぴんぴんしてるのに退院できない、って看護師さんが首傾げてたぞ。……おまえら負目を感じて見舞い行ってなかっただろ。ハメられてんぞ、ここでも」

茂夫　？？？%
芹沢　？？？%

霊幻はとどめに、2人を仕上げてくれた。

※※※※※

その日の夜。××組の事務所やビル、および組員はみんな夜空に浮かび上がった。
当然茂夫たちの超能力である。
事務所やそこにたくわえられていた武器はバラバラになり、グニャグニャに歪められていく。
慌てる人々や崩れていく建造物が、天空の城ラピュタというアニメの最後を彷彿とさせた。
「なっ、なんだ！？何が起こってる！？」
あわあわとタヌキ組長が手をバタつかせて空を切る。
「ながらくのご愛顧まことにありがとうございました。本日をもちまして、××組は解散とさせていただきます」
超能力で増幅した律の声が辺りに響く。
「組長。僕たちを騙しましたね？」
ふわりと組長の前に茂夫が浮かんできた。
「あんたには借りもある。が、返しすぎたみたいだ」
「ひっ」
黒髪をバタつかせる茂夫に、ガタガタと組長は青ざめた。
「今日でこの組は終わりです。あなたが解散を宣言してください」
「な、何言ってやがる！そんなこと──」
「そうですか。それでは上空300メートルからの落下の旅を、組員の皆さんとお楽しみください」
「ヒッ！？！？」
薄ら笑いをしながら、見せつけるように茂夫はゆっくりと手を上げる。
「わ、分かった！分かったよ！！解散だ、解散する！！」
「録音しました。約束を破ればヒモ無しバンジーですからね」
「分かってるよ……」
「じゃあ、芹沢さん。彼らを下ろそうか」
組長はホッとする。ゆっくりとヒトと瓦礫が降下しはじめる。
「おっとー、しまったー」
茂夫に能力を分け与えていた芹沢が棒読みで叫んだ。

「……手が、滑りました」

ぐしゃ。

※※※※※

「結局ここに戻ってくるとはなぁ……」
新たに入っていた大手エステのテナントを金の力で追い出し、霊とか相談所は完全復活をはたしていた。
霊幻は絆創膏だらけの両手で挟んで、そっと湯呑みを運ぶ。
それをひょいと取り上げ、久しぶりに守衛の身体に憑依したエクボが霊幻のデスクの上に置いた。
「……やっぱり、俺様のミスだ。ケンカなんかしなけりゃ……すまねえ、霊幻。まだ、痛むよな……」
「……いや、俺の判断ミスだよ。失踪するのが遅すぎた。そのツケだよ、この傷は。スティグマ、罪のあかしってやつだ。……手放すつもりなら、もっと早くしなくちゃあならなかったんだ」
ふーふーと湯呑みのお茶を冷ましながら、霊幻はどこか上の空で言う。
「あいつらがあんなにここに依存してたなんてな……」
あ？とエクボが怪訝な声をあげる。
「馬鹿、依存してるのはお前にだろ。そこちゃんと反省しねぇと、また同じことが起こるぞ」
「うっ……そうなのか……嬉しいような、やっちまったような……」
ず、とお茶をすすった霊幻は、あちっと声を上げて湯呑みを倒しかける。
「おっと」
それをエクボが支えて止めた。
「……なあ霊幻。これは今回のワビって訳じゃねぇんだが……俺たち付き合って3年もたつだろ」
斜め上を見ながらエクボが懐から小さな箱を出す。
「結婚、してくれねぇか。できれば死んだ後も、一緒にいてくれ」

箱を開けて、取り出した指輪をエクボは霊幻の左手薬指にはめた。
「……えっ、おまえ……その……はい」
頬を染めて霊幻は頷く。単純に嬉しかった。
「えーっ！！エクボずるい！！師匠、僕とも結婚してください。幸せにします！！」
ソファーから立ち上がってモブが慌てて小さな箱から指輪を取り出す。
「はぁ？何言ってやがる……」
「……俺でいいのか」
「はぁあああ！？」
受け入れようとしている霊幻にエクボはひっくり返りそうになる。
「エクボが師匠を一時的にだけど捨てた後に、僕と師匠は付き合ったんだ。だから僕は師匠にプロポーズする権利がある」
「オィィィ、霊幻！！」
ついっと霊幻は視線を斜めに逸らす。
「……そこはお前が悪いんじゃねぇの？あの時はエクボと恋愛関係が続いてるのかも怪しい状態だったし、仕方ねぇじゃん。……嫌なら結婚撤回するか？」
「……っ、撤回するわけねーだろ！！ただ第一夫の座はゆずらねぇ！！」
「いいよ、そこは別にこだわりないし」
エクボの叫びに茂夫は淡々と返す。
「あ、じゃあ霊幻さん、俺とも結婚してください。指輪はまた今度持って来ますね」
「おー芹沢もか。いいぞ〜」
「はぁぁぁああ！？！？」
エクボが腹から叫ぶ。
「え……そういう流れですか？今を逃すと出来なくなりそうなので、じゃあ取り敢えず僕とも結婚してください」
「それでいいのか、律……」
「ちょっと待てぇえええええ！！」
すっ、と輪ゴムを霊幻の指にはめる律にエクボが叫ぶ。が、特に聞き入れられない。

「面白そうだから俺も。いいよな、霊幻さん？たぶんこれ結婚しないと今後セックスできない流れだろ？」
「ショウくん……よく分からんが、この霊幻新隆が引き受けた」
「お前めんどくさくなってきてるだろ！！」
「あ、俺もいいですか」
輝気もその辺にあった輪ゴムをはめて。
こうして。
左手の薬指に6個の指輪をしている所長が、爆誕した。

終

※※※蛇足※※※

「納得いかねーぞ！！何でこんなことになってんだよ！！」
霊幻が帰った後、ある意味まともに付き合っていたエクボが耐えきれずに叫ぶ。
なんとなくエクボや茂夫、芹沢たちが残っていたので、重婚の話になった。
「こじらせてて拷問中に付き合いまで申し込んでた芹沢とシゲオはさておくにしてもよ、輝気やら律やら……花沢やらは完全にノリだろうが！！」
「僕は……あの時は、言えなかっただけだから」
カラン。アイスコーヒーのコップを鳴らしながら律が言う。
「今なら言える。ヤクザやって、超能力をひけらかして生きてみて、初めてわかった。霊幻さんみたいに僕を分かってくれる大人なんて、大事にしてくれるヒトなんて、そうそういないんだ。少なくとも僕は、会ったことが無い。だからじゃないけど……それだけじゃないけど……」
目を交わした影山兄弟の間でピリ、とひりつく空気が走る。それでも律はやめなかった。

「えっちしてエロいとも感じたし、僕は霊幻さんが好きだ……！」
「……律をライバルにはしたくなかったな」
律が余計なことを言ったせいで剣呑なオーラを出す茂夫とは対局に、よく言った、とショウがうんうんと感慨深そうに頷いていた。
「俺は面白そうだからってのも本当のところだけど……まぁいいや、こんなところでカッコつけてもな。律とほとんど同じかな。プロのおねーさんでもさ、怖がるじゃん……俺たちのこと。おねーさんたちだけじゃねぇじゃん？そういうの。俺たちは初対面でも普通の人がうっすら好きだけど、普通の人は最初から超能力者がうっすら嫌い、みたいなの、あるだろ……。でも霊幻さんそれが無かったから、ほだされちまって。なんかかあちゃんのこととかも思い出しちまって……」
「かあちゃん！？！？」
エクボが思わず声を上げる。
「あいや、おさらいだけど、俺父親が強力な超能力者でさ。でもかあちゃんは普通の人なんだよ。でもさ、親父を叱りつけるような怖いもの知らずの人でさ……あー、親父もかあちゃんに同じようなこと思ったのかなぁ……とか思ったら、こう……」
か、か、か、かぁっ、と将の顔が赤くなる。
「霊幻さんが好きだなぁっ、って思っただけ！ハイ終わり！」
次は、と言いたげに全員の視線が輝気に向かう。
「まいったな……僕はその、うっすら霊幻さんが好きだっただけの人間なんだよね」
なら手を引け。そう言いたげな視線が交錯する。
「でもその『うっすら』が今の自分の中では最上級だった。……それで納得してくれるといいんだけど」
「それでも」
ぽつりと茂夫が言う。
「『うっすら』でも、結婚した以上、師匠はテルくんを大事にするだろうから」
どこか悲しそうに。
「『うっすら』じゃなくなるだろうね」
輝気はため息をつく。

「それでも別れる気がないくらいには……とだけ、今は言っておくよ」
しん、と一瞬静まりかえる。
「それでよ、これからどうする？」
その静寂をエクボが破る。
「それじゃあ、今からみんなで殺し合って残った1人が師匠を手に入れることにする？」
「んはあっ！？何言ってんだシゲオ！！」
「冗談だよ」
「冗談に聞こえなかったぜ、お前……」
しかも、圧倒的に茂夫に有利な条件だった。殺し合いをしたら茂夫が圧勝だ。ヤクザになってからちょっと怖くなった気がする……とエクボはひとりごちた。
「まずよ、第一夫は俺様、第二夫はシゲオ、第三夫は芹沢、第四夫は輝気、第五夫は律、第六夫は将だろ？」
「えーなんで俺最後なワケ？」
「『俺に突っ込んだ順だ』って霊幻が決めたんだ。文句ならロマンゼロで決めたあいつに言え」
「……」
ロマンというかデリカシーがゼロだが、文句の出ない決め方に将も黙り込む。
「で、俺は土曜日の霊幻を独占したいんだが」
エクボがそう言い始めて他がキョトンとする。
「シゲオはどうする？」
「えっ、独占する、って」
「いくら他に夫がいるっつっても、常時乱交状態じゃ納得いかないだろ。土曜日は極力お前らは霊幻に連絡しない。会いにもこない。霊幻もなるべく俺様のことだけ考えるようにする。霊幻とも話し合って決めたんだが……どうだ、このシェア方法？」
「の、のった。僕は日曜日がいい」
茂夫が口火を切る。
「じゃあ、俺は金曜日で」
芹沢ものっかる。

「……僕は水曜日かな。定時に上がること、多いって前言ってたし」
輝気も。
「……これって変更アリですよね？とりあえず月曜日で」
律ものる。
「じゃあ火曜日かなー。……木曜日はどうすんの？」
将の言葉に、
「『1日ぐらい俺の尻を休ませろ』って霊幻からの伝言だ」
そうエクボが返すと、どっとみなが笑った。

そのまま解散になり、各人ちりぢりに帰っていく。
しばらく歩いてから、エクボは立ち止まってドッと汗を吹き出した。
（俺様はやりとげたぜ、霊幻……）
業務時間中。霊幻はエクボと2人きりになった隙を見て、『自分が帰宅してから』のことを心配していると言った。
マワしたばっかりの霊幻が目の前にいる間は、能力者たちは負目もあって重婚状態を甘んじて受けているかもしれないが、いなくなれば下手をすると殺し合いを始めるかもしれない、と霊幻は心配していた。
そこで、エクボと話し合って『落とし所』を用意しておいたのだ。
せっかく昔通りになった霊とか相談所をぶち壊すよりは、1日でも霊幻を独占できる『落とし所』を選ぶはず、という霊幻の計算が合ってて良かった、とエクボは胸を撫で下ろす。

（おまえさん案外誰よりも教祖に向いてるかもしれないぜ……）

一仕事終えたエクボは霊幻に癒されにとぼとぼと歩いていく。

なにせ今日は、土曜日なので。

（ご褒美に3Pとかさせてくれねぇかなぁ……シゲオとか誘ってな

ら、OKしてくれるか？）

さすが悪霊、全然コリていなかった。

（おまけに続く）